

山犬の話（四話） = = = 三州横山話より

塩を好む山犬

山犬のことを山ノ犬、オイヌサマなどと言い、これに後をつけられることを送られると言います。夜山道などを通して送られた時は、お礼に門口へ塩をおくと言います。また送って来るときは転んだら食べようと言うから、転ばぬ用心が第一とも言います。五〇年ばかり前に亡くなった早川孫三郎と言う男は、山犬に送られたことがあったということですが、そのとき、お礼に門口へ塩を出したら、姿を顕して食べたと言います。送るときは人の後から随って来ないで、路に沿った木立のなかを、時おり肢音をさせて来ると言うことです。

また山犬は火を嫌うから、夜道をする時は、切火縄を持って歩くものと言います。

山犬は、山の神に誓言して、枯草に鳴いて、青山には鳴きませんと言ったから、夏は鳴かぬと言います。これを山の神の御誓言と言うそうです。

馬には見える山犬の姿

馬方が夜にかけて稼げば、大変利益があるけれど、馬が山犬を怖れて痩せると言います。また、びっしょり汗を掻いているなどとも言います。

早川柳策と言う男が、暮方鳳来寺村の長良というところから馬を曳いて来て、村を出離れて、ふだん山犬が出るという噂のある行者様と言うところへさしかかると、突然馬が手綱を振り切って、もと来た道を馳せ帰ったと言いました。馬は人家の前で、村のものが捕えてくれたと言いましたが、まだ人の顔がぼんやり見えるほどの時刻だったそうです。

煙草の火とまちがえた山犬の眼

ある煙草好きの男が、海老へ行く街道を急用があって夜中に歩いて行く途中で、長良と言うところを出離れて玖老勢へ越す杉林の中で、煙草の火を切らしてしまって、煙草を煙管へ詰めたまま口に啜えながら行くと、行く手に煙草を喫っているらしい火が一つ見えるので、急いで近づいて行って、どうぞ火を一つと、煙管を差し出すと、それは山犬の眼であったのに仰天して、そこに尻餅をついて気絶してしまったと言いますが、山犬の方でも閉口して傍の草叢へ飛び込んだと言う話があります。

水に映る姿

遠江の山住様や、春野山は山犬の神様だと言って、狐憑きなどのあるときは、幾日間と期間を定めてお姿を借りて来ると言います。そのおりはあらかじめ神主に依頼すると、神主が神様に御都合を伺って、行くと仰しゃれば、初めてお札を渡すので、それを受け取ったら決して後を見ないで、どんどん帰って来るのだと言います。もし後を見返ればお犬様が帰ってしまうと言います。それで途中川などがあって、橋を渡ったり、渡し船に乗った時などは山犬の姿が水に映って見えると言います。

家へ着くと、山犬がまずその屋敷を三度廻るものと言いますが、八名郡山吉田村字畑中〔現、南設楽郡鳳来町〕というところのある家では、姿は見えないで、門口で三声で吠えたと言うことです。